
2 2 番目の王子様

あめふらし 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

22番目の王子様

【Nコード】

N9143N

【作者名】

あめふらし3号

【あらすじ】

ある国には、王子様が21人いました。彼らは生まれながらにして、その生まれた順によつてそれぞれの将来を定められていました。

この物語はそんな国の『22番目の王子様』の物語。とある城下町にて目の前の嫌いな少女から逃げ出すためだけに、彼はお姫様を探すべく何の当てもない旅に出る。

序章

ある国には、王子様が21人いました。彼らは生まれながらにして、その生まれた順によってそれぞれの将来を定められていました。

1番目に生まれた王子様は、次期国王に。

2番目と3番目に生まれた王子様は、1番目、2番目の王子様が死んでしまった時のための控えに。

4番目に生まれた王子様は、次期宰相に。

5番目に生まれた王子様は、4番目の王子様が死んでしまった時のための控えに。

6番目と7番目に生まれた王子様は、次期国王の直属の軍隊を率いる隊長と副隊長に。

8番目と9番目に生まれた王子様は、6番目の王子様と7番目の王子様が死んでしまった時の控えに。

10番目と11番目に生まれた王子様は、次期国王の近衛兵に。

12番目と13番目に生まれた王子様は、10番目と11番目の王子様が死んでしまった時の控えに。

14番目と15番目に生まれた王子様は、次期国王の私室を守る兵に。

16番目と17番目に生まれた王子様は、14番目と15番目の王子様が死んでしまった時の控えに。

18番目と19番目に生まれた王子様は、次期国王の執務室を守る兵に。

20番目と21番目に生まれた王子様は、18番目と19番目の王子様が死んでしまった時の控えに。

ウエオレト

ある国のとある城下町に、ウエオレトという少年がいました。

ウエオレトは自分の親を知りませんでした。ウエオレトは自分の兄弟も、年齢も、生まれた日も、知りませんでした。けれど、ウエオレトはそれがちつとも気になりませんでした。

ウエオレトという自分の名前と、男だという自分の性別さえ分かっていたら、それで十分だと思っていました。名前があることで自分は確かに存在していることが分かるし、性別が分かっていたら自分の中にどんな本能が備わっているのかを大体知ることが出来ると思っていたからです。

ある日、ウエオレトは1人の少女に呼び止められました。

「ねえ、今日はまだ貴方から薔薇の花を1本も貰っていないのだけ
れど？」

「僕は君に薔薇の花をこれまであげたことはないし、これからだつ
てあげるつもりはないよ」

ウエオレトはうんざりとした顔をして答えました。ウエオレトはこ
の少女のことが嫌いでした。

けれども少女はそれに全く気付いた様子もなく、「可哀そうに。貴
方はこれまで常識を知らずに生きてきたのね」と言つてウエオレト
に心底同情するかのような眼差しを向けながら、「よく覚えておく
といいわ。好きな女の子には真つ赤な薔薇の花を贈るものなのよ」

と言いました。

ウエオレトは毎日繰り返される少女との会話が嫌で仕方ありませんでした。少女に会わないように避け続けた日もありました。それでもウエオレトは毎日少女に出会い、似たような会話をするのでした。

「僕、旅に出ることにしたんだ」

ウエオレトは唐突にそう言いました。その言葉とともに少女の表情がたちまち強張っていく様子を見て、ウエオレトは少し気分が良くなりました。そして何も言わずにじっとこちらを見る少女に、ウエオレトは続けて「僕は、実はこの国の22番目の王子様なんだ」と言いました。

ウエオレトは権力というものをよく分かっていました。

この地の領主の娘である少女を完全に拒絶すれば、ただの孤児ではない自分がどうなってしまうのかをよく分かっていました。それでもどうしても少女から逃げ出したかったウエオレトが考えたのが、『22番目の王子様』というものでした。

ウエオレトは自分の親を知りませんでした。それは他の人にとっても同じでした。もちろん、この地の領主でさえも知りませんでした。そして、そのことがウエオレトにとっての唯一の強みとなりました。

「僕は、本当はこの国の22番目の王子様なんだけど、22番目にまでなるともう王子様としての役割はないって言われて、22番目

の王子様として認めてもらえなかったんだ。王子様として認めてもらえなかった僕は、母親にも見捨てられてこんなところに置き去りにされてしまったけれど、それでも僕は、本当はこの国の22番目の王子様なんだ。だから僕はお姫様を探しに行かなきゃならないんだ」

「そのために旅に出ることにしたんだ」とウエオレットが言い終えると、目の前の少女の目はまるで野兎のように真っ赤に染まっていた。

「……………薔薇の花じゃなくなっちゃった方がいいのよ。その辺に咲いてる何でもない花だって、何だったらその辺に生い茂ってる草でもいいわ」

少女は言葉を途切れ途切れにさせながらも、まるで挑むかのように言いました。いつもと少し様子の違う少女に、ウエオレットは初めて少女のことが気になりました。

「今日の君は何だか変だよ。草でもいいだなんて。君がいつも欲しがっていたのは真っ赤な薔薇の花でしょう？」

「目が真っ赤だし、熱でもあるんじゃないの？」と少し心配そうに少女の顔を窺いながらそう続けると、もはや耐えきれないといったかのように「もう、いいわ。どこへなりとも行けばいいじゃない！」と言って、少女はその場を走り去ってしまいました。

呆然と走り去っていく少女を見送ったウエオレットは暫くして「結局は単なる癪癢か。心配して損したな」と呟くと、早速旅支度をなるべく家路を急ぎました。

ソルリーナ 1

とあるお城に、とても美しい王妃がいました。

王妃は、自我を持つ魔法の鏡を持っていました。王妃は毎日、その魔法の鏡に向かって何度も同じ問いかけをしました。「鏡よ、鏡。世界で一番美しい女性は誰？」と。

その問いかけに対する答えは、いつも同じでした。王妃は自分こそが世界で一番美しいのだと信じていました。そして魔法の鏡もまたそれに同意し、王妃はとても満足した日々を送っていました。

ある日、王妃はいつものように魔法の鏡に向かって問いかけました。「鏡よ、鏡。世界で一番美しい女性は誰？」と。

魔法の鏡は答えました。

「それは雪のように白い肌、血のように赤い唇、黒檀のように黒い髪を持つ、この城に住むソルリーナ姫です」

王妃はあまりに驚いて、一瞬頭の中が真っ白になったかのように何も考えられなくなりました。けれど次の瞬間、王妃の頭は自分の娘であるソルリーナへの激しい憎悪で一杯になりました。王妃はすぐさま獵師を呼び出させると、ソルリーナを森に連れて行くように命じました。

「王女の肝臓を持ち帰りなさい。私の命に逆らったならば、反逆罪でお前の一族諸共極刑に処します」

獵師は困り果てました。まだ幼さの残る可愛らしい少女を、獵師にはとても殺すことは出来そうにありません。しかし、だからと言って王妃の命に背けば、獵師は一族諸共殺されてしまいます。獵師は悩みながらも、ソルリーナを森へと連れて行きました。

「見て！ あそこにもきれいな花が咲いているわ。森の奥つてきれいな花がたくさん咲いているのね。鳥の声もとってもきれいなね！」

繋いでいる獵師の手を何度も引いては、そのような言葉を口にして無邪気にはしゃぐソルリーナを見つめながら、獵師は一つの決心をしました。

「王女様、あちらにとっても綺麗な花畑がございます」

獵師はそう言つて、少し遠くの、木々が生い茂り陰になっている場所を指差しました。それを聞いたソルリーナは、ほんの少しでも早くその花畑を見たいと思い、繋いだ手を離し、獵師の指差した場所に向かって駆け出しました。その駆け出す姿を確認すると、獵師はソルリーナとは反対方向に向かって駆け出しました。そして、獵師はそのままソルリーナを森の奥に置き去りにしました。

獵師は、森の中で捕らえたイノシシの肝臓をソルリーナの肝臓の代わりにお城に持ち帰りました。それを受け取った王妃は大層喜び、その肝臓を塩茹でにさせてその日の夕食に食べました。

獵師に置き去りにされたソルリーナは、ただひたすらに森の奥へと歩きました。歩き進むうちに段々と日が沈んでいき、それに従って暗くなる森に、ただ一人きりでいることのあまりの心細さにソルリーナが泣き出しそうになる頃、目の前に一つの小さな小屋が見えました。ソルリーナは獵師と別れてから初めての人の気配に嬉しくなり、それまでの疲れを忘れてその小屋へと足早に向かいました。

ところが、ソルリーナが何度その小屋の扉を叩いても返事が返ってきません。ソルリーナは迷いましたが、辺りのあまりの暗さに、外に一人でいることの怖さが勝り、やがて恐る恐るその扉を開けました。

小屋の中にはやはり誰もいないようでした。ソルリーナは小屋の中に入り部屋を見て回りながら、そこにある家具があまりに小さいことについて不思議に思いました。

「一体ここは誰のおうちかしら？」

思わずそう呟きながら、ソルリーナは一番奥の部屋の扉を開けました。

するとそこには7つの小さなベッドが並んでいました。それを見て可愛らしいと思うと同時に、それまで忘れかけていた疲れが一気に襲いかかって来たのか、ソルリーナは急に眠くなりました。そして自分でも気付かないうちにソルリーナは徐にそれらのベッドに横たわると、そのまま眠ってしまいました。

ソルリーナ 2

ソルリーナは何日経っても目覚めません。

小人たちは嘆き悲しみながら、たくさんの綺麗な花と共にソルリーナをガラスの棺に納めました。

ある日、小人たちがガラスの棺を眺めながら泣いていると、白馬に乗ったウエオレトが通りかかりました。

「君たちはどうして泣いているの？」とウエオレトが尋ねると、「お姫様が目を覚まさないからです」と一人の小人が答えました。

ウエオレトはガラスの棺に納められたソルリーナを見て、なんて可愛い人なのだろうと思いました。

「どうして目を覚まさなくなってしまったの？」

ウエオレトがそう尋ねると、小人たちはこれまでにあったことを口々に言いました。

「最初は腰紐を締め上げられて」

「腰紐を切って助けたんだ」

「次は毒付きの櫛を頭に突き刺されて」

「櫛を抜いて助けたんだ」

「あんなに家の扉を開けてはいけないと言ったのに」

「ある日帰ってきたら倒れてて」

「傍には林檎が一つ落ちてるだけだったんだ」

ウエオレトは小人たちと共に、ガラスの棺の蓋を開けました。ウエオレトは徐に、ソルリーナの唇に自分の右耳を寄せました。そしてその状態のまま、ウエオレトは暫くその視線をソルリーナの胸元に向けました。

小人たちはウエオレトが何をしているのか全く分かりませんでした。が、きつとお姫様を目覚めさせることができるに違いないと思い、「どうか、どうかお姫様を助けて下さい」と頼みました。

ウエオレトはソルリーナの唇から右耳を離すと、小人たちに向かって言いました。

「僕にはお姫様を助けることは出来ないよ。だって僕には、お姫様が死んでいるようにしか見えないもの。呼吸はしていないし、肌も青ざめてしまっているし。死んでしまった人を一体どうやって助けられるというの？ 緩めるべきものも、引き抜くべきものもないのに、一体どうやって助けるといふの？ …… 君たちもお姫様が死んでしまったと思ったから、お姫様をガラスの棺に納めたんでしょ？」

小人たちは呆然と目を見開いてウエオレトの言葉を聞いていましたが、やがて一人が泣き始めると、他の小人たちもみんな泣き出し

ました。

ウエオレトは小人たちが泣き続ける中、ガラスの棺に納められたソルリーナを見ました。本当に可愛らしい人だと、改めてそう思いました。どうして死んでしまったのだろう、どうして自分はもっと早くに来なかったのだろうと、もっと早くに来ていたならばお姫様を守ることが出来たのにと、残念で悔しい気持ちでいっぱいになりました。

「君たち、悲しい気持ちも分かるけれど、ずっと泣いてばかりではいけないよ。僕はこの国での死者の弔い方を知らないけれど、早くお姫様を弔ってあげるべきだよ」

小人たちが微かに頷く姿を確認すると、ウエオレトは「それじゃあ、さようなら。僕は旅を続けなくちゃいけないから」と言って、去って行きました。

その後、小人たちはソルリーナを弔うために穴を掘り、その穴にガラスの棺を埋めようとみんなでガラスの棺を運んでいました。ところが、運んでいる途中で小人の一人が小石に躓き、バランスを崩したその拍子に、ガラスの棺を思い切り木にぶつけてしまいました。

小人たちは慌てて、ガラスの棺を地面に置き、その中に納められた

ソルリーナの様子を窺いました。すると、驚いたことにソルリーナの目は開かれていて、自分の身に何が起きたのか分からないためか、ソルリーナはガラス越しにとても驚いた様子で自分を見つめる小人たちを、とても不思議そうに見つめ返しました。

どんなに可愛らしい人でも、死んでしまっている人と結婚するとは出来ないな、とウェオレトは森の中を進みながら思いました。そして、領主の娘であるあの少女は鬱陶しいくらいに毎日元氣いっぱい、生気に満ち溢れていたな、とふと思いました。

ピッソテイラ 1

あるところに夫婦がいました。

夫婦はずっと子供が欲しい欲しいと願っていましたが、なかなか子供を授かることが出来ませんでした。

夫婦の住む家の裏には、一人の魔女が棲む家がありました。その魔女の家には、美しい花や野菜を作った綺麗な庭がありました。けれどもその魔女はとても恐ろしい力を持ち、庭の周りを高い塀で覆われたその魔女の家に、誰一人として近づこうとする者はいませんでした。

長年の願いが叶い、やがて懐妊した妻はある日、家の窓から魔女の庭を眺めていました。するとふと、美しいピッソテイラが生え揃った苗床が目につきました。あんなに青々とした新しい菜を食べたらどんなに旨いことだろうと思うと、妻はそれが食べたくて仕方がなくなりました。

それから毎日毎日、菜のことはかり考えましたが、それはとても食べることが出来そうになく、それが元で妻は病気になり、日を追うごとに痩せて、青くなっていきました。

これを見て驚いた夫が、妻に「お前は、一体どうしちゃったつてんだい？」と尋ねました。すると妻は、「家の裏の庭にピッソテイラが作ってあってさ、あれを食べないと、アタシは死んじゃうよ！」

と答えました。

妻に懇願された夫は、妻のために夜中に魔女の庭に忍び込んで、ピッソティラを摘み取りに行きました。大急ぎで掴み抜いて来た菜を一つ持ち帰ると、妻はそれでサラダを作り、それはそれは美味しそうに食べました。けれどもそのサラダの味がなかなか忘れられず、前よりも食べたい気持ちが一層増して、それを食べないことは夜も寝られないくらいであったので、夫は再び取りに行かなければならなくなりました。

その日も日が暮れてから夫は魔女の庭に忍び込みましたが、塀を下りるとそこに魔女が立っていました。夫はあまりに驚いて、その場に立ちすくんでしまいました。すると、魔女が恐ろしい目で夫を睨みつけながら、言いました。

「お前は何故、夜毎に私の庭に忍び込み、私のピッソティラを盗んでいくのだ？ そのようなことをして、徒では済まされまいよ」

夫は震えながら答えました。

「ああ！ どうかご勘弁を！ 好き好んでこんなことを仕出かしたわけではございません。ただ私の妻が貴方様のピッソティラを窓から覗き見まして、そのあまりの食べたさに、それを食べないでは死んでしまうまでになったのです」

それを聞いた魔女は機嫌を直して、夫に向かって言いました。

「ああ、それなら好きなだけ持って行けば良いよ。だが、それにはお前の妻が産んだ子供を私に渡すと、約束をしなければいけない。私がお前の妻に代わって、その子供を育ててやるう」

夫はそのまま、魔女の言うとおりに約束をしてしまいました。

妻がいよいよ出産をすると、そこに魔女が現れて、生まれたばかりの子供にピッソティラと名付けると、そのまま連れ去りました。

ピッソティラはとても美しい少女に成長しました。ピッソティラが十二になると、魔女はピッソティラをある森の中にある塔の中に閉じ込めてしまいました。その塔には梯子もなく、出口もなく、ただ頂上に小さな窓が一つあるだけでした。そのため、魔女が中に入ろうと思った時には、塔の下でこう言いました。

「ピッソティラや！ ピッソティラや！ お前の髪を下げておくれ！」

ピッソティラは黄金に輝く、とても美しく長い髪を持っていました。魔女の声が聞こえると、ピッソティラは自分の編んだ髪を解い

て、窓から塔の下まで垂らしました。そして魔女は、この髪に掴まって塔を登ってくるのです。

ピッソテイラ 2

ある日、ウエオレトが森の中を歩いていると、何処からかとても美しい歌声が聞こえてきました。

なんて美しい歌声なんだろう。一体誰が歌っているんだろうか、と思ったウエオレトは歌声が聞こえる方に向かって歩いて行きました。

歩き続けるうちに、ウエオレトはとても高い塔を見つけました。

この美しい歌声はどうやら塔の中から聞こえるみたいだと思ったウエオレトは、高い塔を見上げました。すると、頂上に小さな窓があり、そこにピッソテイラがいるのが分かりました。あの人が歌っているのだろうか、ウエオレトは目を凝らしました。

けれどもその小さな窓はあまりに高い所にあつたので、ウエオレトにはピッソテイラの姿がよく見えませんでした。ウエオレトは一体どんな人が歌っているのだろうか、確かめたくて仕方がなくなりました。けれどもその塔には梯子もなく、出入り口もありませんでした。

それでもウエオレトは何とか塔の中に入る方法はないかと考えましたが、何も思い浮かびませんでした。残念でなりませんでした、ウエオレトはそのままその場を立ち去ろうと塔に背を向けて歩き出しました。すると突然、背後の塔の方から歌声を打ち消す大きな声が聞こえました。

「ピッソティラヤ！ ピッソティラヤ！ お前の髪を下げておくれ！」

声に驚いたウエオレトが振り返ると、そこに先程まではいなかった老婆が一人立っていました。ウエオレトが呆然とその老婆を見ると、高い塔の頂上にある小さな窓から、黄金に輝く何かが老婆の目の前まで垂らされました。そして老婆は目の前にあるそれをしっかりと握ると、そのまま塔を登り始めました。

ウエオレトが呆然としたまま見つめる中、老婆はゆっくりと塔を登り続けました。やがて老婆は塔の頂上にある小さな窓までたどり着き、その窓から塔の中へと入っていきました。その様子もじっと見つめていたウエオレトは、老婆が握る黄金に輝く何かが、ピッソティラの髪の毛であることに気がつきました。老婆が塔の中に入るとその黄金の髪の毛もまた、ピッソティラによって手繰り寄せられ、塔の中へと消えていきました。

ウエオレトはどうしようかと迷いましたが、結局老婆が塔の外へと出ていくまで塔の傍でこっそりと待つことにしました。

暫くすると、再び高い塔にある小さな窓から黄金に輝く髪が垂らされ、塔の中へ入った時と同じようにそれをしっかりと握りながら老婆は塔の外へと出て行きました。老婆がその場を去って行ったのを確認すると、ウエオレトは塔の前に立ち、ピッソティラに向かって大きな声で言いました。

「ピッソティラや！ ピッソティラや！ お前の髪を下げてください！」

ピッソティラはウエオレトの声を聞き、老婆は先程塔を去ったばかりであるはずなのに、一体どうしたことだろうと不思議に思いました。

「老婆、今日はまだ何か用があるのかい？ それから、髪ならまだ下がったまんまだよ」

そう言った後、ピッソティラは徐に塔の下を見て、そこにいるのが老婆ではないことに気づき、とても驚きました。そして先程よりも大きな声で尋ねました。

「お前は誰だい？」

「僕の名前はウエオレト。君の名前は？」

「アタシはピッソティラ。ウエオレトはそこで何をしているんだ？」

ピッソティラのその問いかけに、ウエオレトは自分が身を潜めて、老婆がやって来た時からじっとその様子を見ていたことを思い出し、少し後ろめたい気持ちになりました。

「……森の中で君の歌声が聞こえてきて、綺麗な歌声だなんて思ってた。……一体誰が歌っているんだろうって気になって、ここまで来てしまったんだ」

けれどもそんなウエオレトの言葉に、ピッソティラは嬉しそうに頬を緩ませて言いました。

「そうかい。そんなにアタシの歌が気に入ったんなら、また歌ってやろうか？」

ピッソティラ 3

ピッソティラの言葉にウエオレトがすぐに頷くと、ピッソティラは一度ゆっくりと深呼吸した後、歌い始めました。その美しい歌声にウエオレトはすっかり夢中になり、ピッソティラが歌っている間、身動き一つせずにただじっとその歌声に聴き入りました。そしてピッソティラもまた自分の歌にじっと耳を傾けるウエオレトを見て嬉しくなり、もっともっと歌いたい気持ちになって、自分の知っている歌を次々に歌いました。

ピッソティラが自分の知っている歌全部を歌い、やっと歌うのをやめると、ウエオレトは思い切り手を叩きながら言いました。

「すごい、すごい。本当にとっても綺麗な歌声だったよ。僕のためにたくさん歌ってくれて、どうもありがとう」

するとピッソティラは「お安い御用さ」と言って笑いました。

「アタシもこんなに思いっきり歌ったのは初めてだよ。楽しかった」
ピッソティラがそう言ってまた楽しそうに笑うので、ウエオレトも嬉しくなりました。

ウエオレトはふと、不思議に思っていたことを思い出しました。少し迷ったものの、結局知りたいという気持ちを押さえることが出来ずに、ピッソティラに尋ねました。

「ところで、ピッソティラはどうしてそんなところにいるの？ ……ここからじゃ扉も階段も見当たらないけど、ピッソティラはそこから外に出られるの？」

ピッソティラはウエオレトの言葉に、すぐさま表情を暗くしました。それを見てウエオレトが慌てて何か言おうとしましたが、それよりも先にピッソティラはゆっくりと話し始めました。

「……アタシは親に捨てられたのさ。“ピッソティラ”と引き換えにね」

そしてピッソティラは自分の父親が母親のために毎夜、魔女の庭に忍び込んで“ピッソティラ”を盗んでいったこと、そしてそれに怒った魔女に対して、父親がまだ母親のお腹の中にいた自分を差し出したことをウエオレトに話しました。

「小さい頃はお婆の家で暮らしていたんだけど、ある時お婆に突然ここに連れて来られてね、それからはずっとここに閉じ込められた

つきりさ」

それを聞いたウェオレトは、やはり自分は聞いてはいけないことを聞いてしまったと後悔しました。そして何も言えずにいるウェオレトに対して、ピッソティラはすぐさま続けて言いました。

「ウェオレトが気にすることは何もないさ。それにアタシだって一生ここに閉じ込められてる気はないよ。……いつか必ず一人前の魔女になって、こんなところとつと出てってやる」

「そうだ、ウェオレトもこっちに来ないかい？ お婆が出入りするのを見てたんだろ？ そら、そこに垂れてるアタシの髪に掴まって登ってくればいい」

不意に、ピッソティラがウェオレトに向かってそう言いました。そして続けてまた、「そら、登っておいでよ」ともう一度誘うピッソティラの言葉に、ウェオレトは目の前に垂れるピッソティラの長い黄金に輝く髪の手を見ました。それからその髪の手を辿るようにして、ピッソティラが顔を覗かせる塔の頂上にある小さな窓を見ました。

ウェオレトには目の前にある、この高い塔の頂上まで登る勇氣はあ

りませんでした。それにウエオレトにはあの老婆のように、ピッソティラの髪の毛を掴んでこの高い塔に登ることが、どうしても出来そうにありませんでした。

「……ごめん。僕は旅の途中で、先を急がなくちゃいけないんだ。綺麗な歌声を聴かせてくれて、どうもありがとう。でも、僕はもう行かなくちゃいけないんだ」

そう言つてウエオレトが断ると、ピッソティラはとても残念そうな顔をしました。

「そうかい。……そりゃあ、仕方ないね」

暗い声で答えるピッソティラを見て、ウエオレトは心が苦しくなりましたが、それでもこの塔に登ることは出来ないという気持ちは変わりませんでした。

「……何もしてあげられなくて、ごめん。でも、ピッソティラが早くそこから出られるように祈ってるよ」

そう言つて、ウエオレトはピッソティラに向かって手を振りながら、その場を去りました。

どんなに綺麗な歌声を持つ人でも、あんなにも長い髪の毛を持つ人とは結婚できないな、とウェオレトは少し遠くにある海を眺めながら思いました。そして、領主の娘であるあの少女は呆れるくらいに毎日しっかりと、その肩を少し過ぎるくらいの髪の毛を整えているな、とふと思いました。

カムナ 1

とある海の奥深く、大小色とりどりの魚や珊瑚、そして鮮やかな緑色の海藻に囲まれた世界に、一人の王様がいました。その王様には6人の人魚の娘がいて、そのうちの一番末の娘の名前をカムナといいました。

カムナは末の娘ということもあり、上の姉たちにも少々甘やかされて育ったせいか、昔から問題ばかり起こしては王様を困らせていました。けれどもカムナの愛らしい微笑みを前にすると、王様も、そしてカムナに迷惑を掛けられた海の生き物たちも、いけないとは思いつつもそれをすぐに許してしまうのでした。

最近の王様の悩みは、この末の娘のカムナについてでした。カムナもいよいよ明日で15歳の誕生日を迎えます。この世界では15歳で一人前の人魚として認められ、それまでずっと禁じられてきた海の外の世界を見ることができるようになります。

カムナは幼い頃から、海の外の世界、特にそこに住む人間について誰よりも興味がありました。時折、海の中に落ちてくる人間たちの使う道具や装飾品を拾っては、それを自分の住む場所に飾って、飽きもせずずっと眺めていることもよくありました。

王様もそのことをよく知っていたので、またカムナが何か問題を起こすのではないかととても心配でした。これまでは海の中だけでの

ことでしたが、明日からはそうではなくなるのです。うつかり人間たちにその姿を見られるようなことがあったならば、一体彼らにどんな目に遭わされるか分かりません。王様はこれまで何度もカムナにそのことを言っただけで聞かせましたが、カムナはいつも笑うばかりで真面目に聞こうとしません。

「大丈夫よ、お父様。ちゃんと人間たちに見つからないように、こっそり覗いてくるわ」

「よいか。人間たちには絶対に、見つからないようにするのだぞ」

「……お父様ったら、さつきから同じことをもう三回もおっしゃっているわ」

明くる日に催されたカムナの誕生日を祝う宴は、大層豪華なものでした。集まった生き物たちは皆、歌ったり踊ったりしてその場を盛り上げ、共にカムナの誕生日を祝いました。カムナもまたその姿を見て大層楽しそうに笑い、また初めて味わうお酒にすっかり夢中になりました。

長い宴が終わって集まった生き物たちも皆帰ると、カムナもまた自分の住む場所に帰り、それまで身に着けていた装飾品を外しました。そしてそれらを丁寧に大きな貝殻の中にしまっていると、すぐ近くで自分の名前を呼ぶ声が聞こえました。振り返ってみると、そこにはカムナの5人の姉のうちの一人がいました。そのどこか暗い表情に、カムナは何か悪いことでもあったのだろつかと思い、姉に尋ねました。

「お姉様、どうなさったの？」

「……貴女、やっぱり今夜行くつもりなの？」

今日でやっと、晴れて15歳になったカムナが行く場所は一つしかありません。カムナは姉の問いかけに、すぐに頷きました。

「ええ。だって前からずっとこの日が来るのを楽しみに待っていたのよ？ 昨日の晩だってあまりに今日が待ち遠しくて、ほとんど眠れなかったんだから」

そう言っただけで笑うカムナを前にしても、いつものように姉の表情が晴れることはありませんでした。

「……そうね、貴女がとても楽しみにしていたのは分かるわ。でも……今夜は何だかすごく良くないことが起こりそうな気がするの。機会ならこれからいくらでもあるわ。だから今夜は……」

カムナはそこまで聞くと、姉が最後まで言い終わらないうちにするりと姉の横を通り抜け、そこで一度振り返るところ言いました。

「ご心配ありがとう、お姉様。でも、どうしても今夜行きたいの。海の外の世界を一目見たら、すぐに戻って来るわ」

そして姉が呼び止める声も聞こえない振りをして、カムナは一人、ひたすら上へ向かって泳いで行きました。

カムナ 2

カムナは生まれて初めて見る海の外の世界に、とても感動しました。頭上に広がる輝く星空や、岸の向こうに微かに見える人間の暮らす街並みなど、もっともっと近くで見てみたいという気持ちになりましたが、カムナにもそれは決して叶わないことだということが分かっていました。

カムナが暫く夜空を眺めていると、遠くから何か大きなものが近付いてくるのが分かりました。カムナがその方向に目を向けると、遠くの方から一隻の大きな船がこちらに近づいてくるのが見えました。

「船だわ！」

カムナは喜びのあまり、思わずそう叫びました。カムナは人間の船が大好きでした。海の底に沈んだ難破船は、カムナにとって一番のお気に入りの場所で、海の仲間たちとの遊び場であり、また隠れ家でもありました。カムナは実際に動く船を見て、本当にあんなにも大きなものを人間は自由に動かすことが出来るのかと、とても驚きました。

船が近づいてくるにつれて、その船に乗っている人たちの姿もはつきりと見えるようになりました。けれどもカムナは心の中でも何度も『あともう少しだけ、あともう少しだけ』と唱えながら、なかなか海の中へと戻ろうとはしませんでした。

ウエオレトは初めて見る海というものに、最初はただただ驚きました。海はウエオレトが知っている川とは比べものにならないほど大きなもので、その水は川とは違って舐めるとしょっぱい味がしました。ウエオレトは船に乗り込んだ後も、飽きもせず一日中ずっと海を眺めていました。

ウエオレトが船の甲板で海を眺めていると、不意にぽつりと何か自分の体に当たったような気がしました。気のせいだろうかとうエオレトが考えていると、続いてぽつりぽつりと先程よりもたくさんウエオレトの体に何かが当たりました。そこでウエオレトが頭上の空を見上げてみると、空から小さな雨粒が降って来ているのが分かりました。

雨は次第に激しいものになり、ウエオレトは慌てて船内へと戻りました。ウエオレトが船内に入ると、大勢の人たちがそれぞれ身を寄せ合い、誰もが不安げな顔をしていました。ひどい雨が降り続ける中、船員たちは慌ただしく船の上を駆け回っていましたが、状況は一向によくなりませんでした。

やがてぐらりぐらりと船が大きく揺れるようになり、誰かが「嵐だ！」と叫ぶと、船内はたちまち混乱しました。誰もが何かを叫びながら、逃げ場所を求めて船内を駆け回っていました。そんな状況の中、ウエオレトは人波に押し潰されないように、隅の方にある柱にしっかりとしがみつきのながら、こつそりと身を潜めました。

一体どうなってしまうんだろう、とウエオレトが考えていると、突然みしみしと何かが軋むような音が響き、そして次の瞬間、あつと

いう間に船は壊れてしまいました。

先程まで目の前にあった大きな船が、突然の嵐によってほんの一瞬にして壊れていく様を、カムナはただ呆然と見ていることしか出来ませんでした。嵐はますますひどくなるばかりで、このままでは自分も危険だと思い、カムナは後ろめたさを感じながらも海の奥底へと戻ろうとしました。するとちょうどその時、激しい音を立てる波間を縫うかのようにして、懸命に泳ぐウエオレトの姿がカムナの目に飛び込んできました。

こんなにもひどく荒れた海の中を、人間が無事に岸まで泳ぎ切れるはずがない、とカムナはウエオレトを助けに行こうとしましたが、激しい波でウエオレトの姿はあっという間に見えなくなってしまいました。カムナはそれでも周囲を見渡して必死にウエオレトの姿を探しましたが、やはり見つけることが出来ず、仕方なくそのまま海の奥底へと戻って行きました。

海はとても大きくて綺麗だけれども、もう二度とあんな嵐には遭いたくないな、とウエオレトは荷馬車に揺られながら思いました。そして、海よりも小さいけれども、幼い頃からよく魚を取りに通ったあの町にある川の方が好きだな、とふと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9143n/>

22 番目の王子様

2011年5月28日11時57分発行